

平成22年度購入文化財一覧

【九州国立博物館】（計20件）

- 1 ○種 別 <絵画>  
 ○名 称 絹本着色仏涅槃図 命尊筆  
 （けんぼんちやくしよくぶつねはんず みょうそんひつ）
- 作 者 等 命尊筆  
 ○時 代 鎌倉時代・元亨3年（1323）  
 ○品 質 絹本着色。掛幅装。画絹一副一舗。  
 ○員 数 1幅  
 ○寸 法 等 縦 270.0 横 212.4 cm  
 ○作品概要 拘尸那揭羅における釈迦の入滅、涅槃の様子を、鎌倉時代以降主流となる縦長画面に描く。釈迦が目を開け、錫杖の周りに蜂が飛び、釈迦の足元に尼僧が待するなど、特徴的な図様がみられる。四周には蓮華文の描表装が巡る。紙背に貼付された供養銘から、元亨3年（1323）、法華寺比丘尼行施が願主となり、命尊によって描かれたことが分かる。尊は南都を中心に活躍した絵仏師で、大幅ながら細部まで意を尽くした入念な描写は現在確認されている命尊の作例のなかでも出色の出来栄えを示している。鎌倉時代を代表する完成度の高い優品であるとともに、制作年代、筆者、願主まで明らかな基準作として極めて貴重である。画面全体の折れや断裂も一部あるが、後補はきわめて少ない。
- 来 歴 奈良・法華寺伝来  
 ○購入金額 300,000,000円（平成22年度第1回鑑査会議）



- 2 ○種 別 <絵画>  
 ○名 称 紙本着色物語図 二曲屏風 伝依屋宗達筆  
 （しほんちやくしよくものがたりず にきよくびょうぶ でんたわらやそうたつひつ）
- 作 者 等 伝依屋宗達（生没年不詳）筆  
 ○時 代 江戸時代・17世紀  
 ○品 質 紙本着色  
 ○員 数 1隻  
 ○寸 法 等 縦 122.5 横 271.1 cm  
 ○作品概要 基壇に建つ入母屋造の建物と、檜皮葺の四脚門の周辺を行く貴人と従者の姿を描く。主題は明らかでないが、依屋宗達筆「西行物語絵」（重文、個人蔵、渡辺家本）や、同じく宗達筆「西行物語絵」（重文、諸家分蔵、旧毛利家本）と同形の人物やモチーフが認められる。落款や印章はないが、人物表現の特徴、樹木へのいわゆる「たらしこみ」技法の使用、および金箔や金銀泥、金切箔、金野毛、金砂子など多様な金銀の組み合わせ方法を鑑みると、江戸時代初頭に活躍した絵師・依屋宗達の周辺で制作された可能性が高い。ただし一部に宗達の真筆と認めがたい部分が見られることから、宗達の活動年の下限頃にその強い影響下において制作されたものと考えられる。
- 購入金額 60,000,000円（平成22年度第1回鑑査会議）



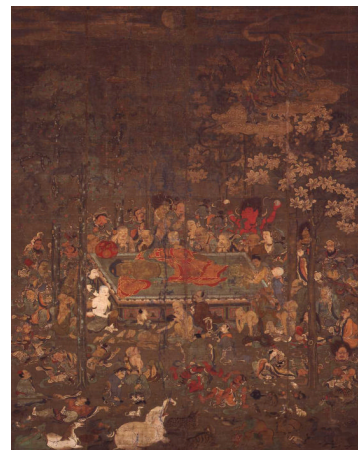
- 3 ○種 別 <絵画>  
 ○名 称 紙本着色病草紙断簡（せむしの乞食法師）  
 （しほんちやくしよく やまいのそうし だんかん せむしのこつじきほうし）
- 時 代 平安-鎌倉時代・12世紀  
 ○品 質 紙本着色。掛幅装。（詞書2紙と絵1紙）  
 ○員 数 1幅  
 ○寸 法 等 縦 26.0 横 38.0 cm  
 ○作品概要 珍しい病や症例を描く「病草紙」のうち、首から背を大きく曲げ、錫杖を手に画面左方へ歩く乞食（こつじき）法師の様子を描いたもの（名称は詞書による）。この法師は首の骨が硬く、頭を上げられないため、常に俯いて歩いたという。周りには法師を嘲笑する人々が表現されている。「病草紙」は、仏教の経典に説かれる前世の因果



による奇病を示したものと考えられている。作風が「地獄草紙」（国宝、東京国立博物館）や「餓鬼草紙」（国宝、京都国立博物館）など、12世紀末に後白河法皇の下で活躍した絵師・常盤光長に近似することから、本図もその周辺で制作された可能性が高い。当初は京都国立博物館所蔵の「病草紙」10面（国宝）などと共に一巻の卷子として名古屋の関戸家に伝来していたが、その後現在の掛幅装に改変された。

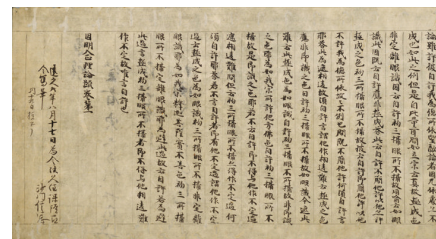
- 来歴 大館高門、関戸家旧蔵。
- 購入金額 262,500,000円（平成22年度第2回鑑査会議）

- 4 ○種別 <絵画>  
 ○名称 絹本著色仏涅槃図  
 （けんぼんちやくしよくぶつねはんず）  
 ○時代 鎌倉時代・13世紀  
 ○品質 絹本著色。掛幅装。画絹四副一舗。軸首と環（3ヶ所）は銅製鍍金。  
 ○員数 1幅  
 ○寸法等 縦202.5 横160.3 cm  
 ○作品概要 縦長の画面に右手を枕にして横たわる釈迦を多数の菩薩や動物が囲むという、鎌倉時代以降の涅槃図の典型的な図様をもつ。その一方で、釈迦が目を開ける点、釈迦の足下に尼僧を描く点、黒いテナガザルを描く点など特徴的な図様もみえる。表現に着目すると、伝統的な仏画の描法を抛りどころとしながら、諧調のある墨で巧みにとらえた湧雲や小刻みに蛇行する衣文線など宋画に由来する表現が散見される点も興味深い。金泥を多用する点、寒色系の彩色が支配的である点などから、鎌倉時代後半13世紀の制作とみなされる。剥落や小欠損部の補絹が一部にみられるものの、補筆は少なく全体として当初の全容を保っている。



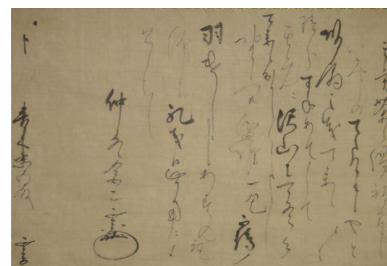
- 購入金額 180,000,000円（平成22年度第3回鑑査会議）

- 5 ○種別 <書跡>  
 ○名称 紙本墨書興福寺関係文書  
 （しほんぼくしよこうふくじかんけいもんじょ）  
 ○時代 鎌倉時代・文治5年（1189）頃-建久9年（1198）  
 ○品質 紙本墨書。卷子装。  
 ○員数 1巻  
 ○寸法等 31.9cm（軸含む）、横1862.9cm、表紙 縦29.5cm 横29.3cm  
 ○作品概要 興福寺別当覚憲（1131～1213）が受け取った院宣・八条院令旨・摂関家長者御教書等の古文書34通を貼り継ぎ、その紙背に覚憲の弟子・信憲（1145～1225）が建久9年（1198）に文軌撰『因明入正理論疏』巻第一を隆昌に書写させたもの。本来は、経典を内側にして巻いていたものと思われるが、現状では古文書を内側にして巻いている。本文料紙数は34紙。1紙長は52.0～55.0程度。第2紙での計測では、経典は1行20字から25字詰め、1紙24行、界高24.3、界幅22.0、上欄2.9、下欄2.3。縦の長さを合わせるため、古文書はみな下端を切断されている。表紙と軸は後補。軸に接続する紙が新補されている。虫損や破損はあるが、補修されている。全体に保存状態は良好。経文に脱落なし。



- 購入金額 35,000,000円（平成22年度第1回鑑査会議）

- 6 ○種別 <書跡>  
 ○名称 紙本墨書伊達政宗自筆書状  
 （しほんぼくしよだてまさむねじひつしよじょう）  
 ○作者等 伊達政宗  
 ○時代 江戸時代・17世紀  
 ○品質 紙本墨書  
 ○員数 1幅  
 ○寸法等 （本紙）縦33.1 横48.7 cm  
 ○作品概要 掛幅装。





本文全 12 行。行草体の漢字と仮名交り文で揮毫する。保存状態は、本紙・表装とも良好。筆者の伊達政宗（1567～1636）は、室町時代末期から江戸時代初期にかけての武将、仙台藩祖。

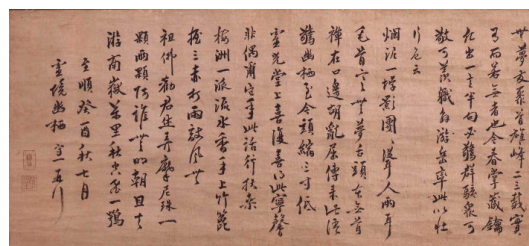
本書状は、家臣の青木忠五郎友重（1605～36）に宛てたもので、年未詳ながら、書風と花押から晩年の江戸時代寛永年間前半（1624～35）の 11 月 22 日の執筆と推定される。内容は、明日の茶会へ招かれることを楽しみにしていること、沢山持っているだろうが香木一包と鶴の羽を貴殿に進上すること、明日の準備でせわしいだろうからこの礼は無用であることを、晩年期の闊達自在な筆致で記す。

○購入金額 4,000,000 円（平成 22 年度第 1 回鑑査会議）

7 ○種別  
○名称

<書跡>  
紙本墨書惟堂守一墨蹟 与無夢一清偈  
(しほんぼくしよいどうしゆいちぼくせき  
むむいっせいにあたうるげ)

○作者等 惟堂守一  
○時代 中国・元時代・至順 4 年（1333）  
○品質 紙本墨書  
○員数 1 幅  
○寸法等 (本紙) 縦 32.5 横 71.4cm  
○作品概要 掛幅装（一文字なし）。



本文全 18 行。楷書体と行書体を交えて謹直に墨書する。角軸。

筆者の惟堂守一（?～1333～?）は、中国・元時代の破庵派の臨済僧・虚谷希陵の法嗣。本作品は、東陽徳輝の下で修行していた日本からの入元僧・無夢一清（1294～1368）の旅立ちに贈った餞別偈で、禅僧としての大成を期待するもの。円爾（1202～80）の法孫にあたる無夢は、嘉元年間（1303～05）に入元し、観応元年（1350）博多に帰着、その後、東福寺 30 世などをつとめ、応安元年（1368）同寺天得庵に 75 歳で示寂した。本作品は、日中の禅の交流を物語る重要な史料であるばかりか、惟堂の遺墨として唯一のもので大変貴重である。のち、元和 5 年（1619）に江月宗玩（1574～1643）が鑑定したことがその著『墨蹟之写』に見え、その後、仙台藩四代藩主伊達綱村が収集し、同家に伝わった。

○来歴 仙台伊達家伝来  
○購入金額 150,000,000 円（平成 22 年度第 3 回鑑査会議）

8 ○種別  
○名称

<書跡>  
紺紙金字三昧水懺法  
(こんしきんじざんまいすいぜんほう)

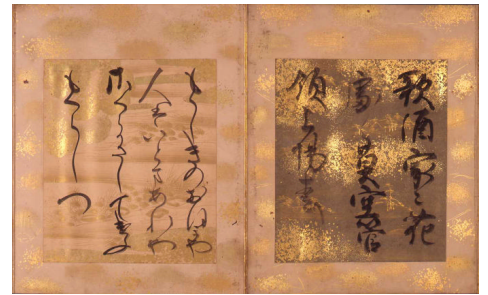
○作者等 照明  
○時代 中国・明～清時代・15～17 世紀  
○品質 紺紙金字  
○員数 3 帖  
○寸法等 (巻上) 表紙 縦 33.9 横 12.1 本紙 縦 33.9 全長 1088.6  
(巻中) 表紙 縦 33.9 横 12.1 本紙 縦 33.9 全長 1014.3  
(巻下) 表紙 縦 33.9 横 12.1 本紙 縦 33.9 全長 1041.1 cm



○作品概要 紺紙金字。折本装。上・下巻の表裏表紙は当初と推定される。上巻巻頭に金泥で描かれた見返し絵は、三昧水懺起縁の内容に拠った唐の悟達国師知玄の物語である。続いて、金泥にて龍牌、三昧水懺起縁、本文と続く。下巻巻末には牌に願文を記し、最末には合掌して立つ韋駄天像を描く。本文は 1 行 15 字詰め、半葉 5 行。文中には金泥で句点を施す。料紙は、法華経が印刷された紙を転用したもので、藍染めされた後も版本の文字が透けて確認できる。版本も 1 行 15 字詰め句点がある。見返し絵と龍牌は墨で下絵を描き金泥でなぞっているが、かならずしも下絵に忠実ではない。紺または薄茶の紙で裏打ちされている。裏打ち後に料紙を貼り継いでいるので、当初からの裏打ちの可能性もある。巻首・巻末や紙背に朱筆で記された文字がある。

○購入金額 8,500,000 円（平成 22 年度第 3 回鑑査会議）

9 ○種 別 <書跡>  
○名 称 彩箋墨書詩歌色紙帖 近衛信尹筆  
(さいせんぼくしよしいかしきしじょう  
このえのぶただひつ)



○作 者 等 近衛信尹  
○時 代 安土桃山～江戸時代・17世紀  
○品 質 彩箋墨書  
○員 数 2帖  
○寸 法 等 (各帖)縦29.9 横24.3 高さ5.7  
(色紙)縦20.8 横17.9 cm

○作品概要 彩箋墨書。両面折帖仕立。  
筆者の近衛信尹(1565～1614)は、安土桃山時代から江戸時代の公卿。その書は、はじめ室町時代の持明院流に学び、しだいに藤原定家の書などの家蔵の古筆・古典籍を研究して、近衛流(または三藐院流)と呼ばれる独自の書法をうちたてた。この時代の代表的能書である「寛永の三筆」の一人として、日本書道史上に名高い。本作品は、萌黄、深緑、白、白茶、縹、薄縹、茜の各色の料紙に、金銀の箔と泥を用いて山水や草花等を描いた料紙に、四季の順に『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』所収の漢詩と和歌を1首1葉に揮毫し、2帖で合計72枚の色紙を収める。筆致は、濃淡、緩急、太細といった変化に富み、雄渾かつ華麗に書法の妙を披歴し、完成度が高い優品である。

○購入金額 15,000,000円 (平成22年度第3回鑑査会議)

10 ○種 別 <陶磁>  
○名 称 黄清香茶壺  
(きせいこうちやつぼ)

○作 者 等 中国  
○時 代 南宋-元・13-14世紀  
○品 質 陶器。紐輪積、轆轤・叩き調整。  
○員 数 1口  
○寸 法 等 高43.6cm 口径12.3cm 胴径15.2cm 底径35.8cm

○作品概要 底部からやや斜めに開きながら立ち上がる。腰部辺りでゆるやかに上方へと伸び、長胴形となり肩部から丸く頸部へとすぼめていく。頸部は内湾しながら立ち上がり、玉縁状の口縁とする。肩上部に二条の凹線と波状文を巡らす。肩と口頸部の付け根の間に四つの耳を貼り付ける。腰部から頸部内側までやや緑がかかった黄褐色釉を施す。底部中央に貼札「黄清香御壺／仙臺伊達家傳來」(墨書)あり。貼札左に花押状の墨書あり。釉調から「黄清香」と呼ばれるもので、入が入る部分はあるものの完形である。長持ち状の外箱と内箱が添う。外箱、内箱の墨書、貼札、底部の貼札は仙台伊達家傳來と伝える。南北朝以来賞翫されてきた唐物茶壺の姿をよく伝える作品である。

○来 歴 伝 仙台伊達家傳來  
○購入金額 8,000,000円 (平成22年度第1回鑑査会議)



11 ○種 別 <陶磁>  
○名 称 耳付水指 高取(みみつきみずさし たかとり)

○作 者 等 高取  
○時 代 江戸時代・17世紀  
○品 質 陶器の耳付水指。  
○寸 法 等 高19.5cm 口径11.3cm 底径15.0cm

○作品概要 鉄分を含んだ暗褐色の細かな胎土を轆轤で成形する。平底から腰と肩をふくらませ、口縁はくっきりと開く。肩の側面二方には塊状の耳を付け、胴部は三方からゆったりと撓める。肩上部には太くゆらぎのある凹線を一重巡らし、耳横に一ヶ所△状の彫りを入れる。肩と腰の間は凹線で区画し、「\」、「/」、「×」、「|」と太い凹線で飾る。底部を除いた外面と内面底部、内側面の一部に暗緑褐色の釉を施す。

本作品はかつて唐津と考えられていたが、近年の発掘調査により高取の内ヶ磯窯の作であることが明らかになったもの。その大胆な造形は、同時期の美濃、



伊賀、備前などの水指とも共通しており、畿内で隆盛する茶の湯の需要を背景に作られたものであることがわかる。

○購入金額 9,000,000円 (平成22年度第3回鑑査会議)

- 12 ○種 別 <漆工>  
○名 称 葡萄栗鼠螺鈿箔絵料紙硯箱  
(ぶどうりすらでんはくえりょうしすずりばこ)  
○時 代 琉球・第二尚氏時代・18~19世紀  
○品 質 木製漆塗。  
○員 数 1具  
○寸 法 等 (硯箱) 縦 26.4cm 横 21.3cm 高 6.0cm  
(料紙箱) 縦 45.1cm 横 36.2cm 高 12.5cm



○作品概要 硯箱、料紙箱ともに、長方形、被蓋造とし、蓋鬘の下端は波形に形を整え、玉縁に仕立てている。器表は潤塗、身内と底は黒漆塗とし、玉縁の部分に朱塗とする。文様は、蓋表、蓋鬘および身の側面に葡萄栗鼠を密に配したもので、葡萄と栗鼠は夜光貝を貼り付けてあらい、栗鼠の面貌や毛の流れ、葉脈などの細部を付描で描く。また、蔓や一部の葉は箔絵で表現し、葉脈には針描を用いる。蓋鬘下端を波形に削った特殊な形の料紙硯箱で、後世修理が見られるものの保存状態は良好である。多産を意味する葡萄栗鼠文様は、アジア諸国の工芸品に見られる吉祥文であり、このように螺鈿と箔絵技法を併用して器表全体を埋め尽くす文様構成は、琉球漆器の典型作の一つとなっている。

○購入金額 3,500,000円 (平成22年度第3回鑑査会議)

- 13 ○種 別 <染織>  
○名 称 浅葱地牡丹松梅桜散し文紅型衣裳  
(あさぎじぼたんまつうめさくらちらしもんぴんがたいしょう)  
○作 者 等 沖縄・首里  
○時 代 琉球 第二尚氏時代-明治時代初期・19世紀  
○品 質 苧麻。数力所に小さな虫喰いが認められるが状態は総じて良好である。



苧麻単糸平織(経:撚無し、25本/cm 緯:撚無し、28本/cm)。紅型両面染め。文様は牡丹、松、梅、桜文の小文様で、それぞれ2つから3つの花数にまとまり、鳶文をあわせ、地間には単体の桜文を散らしている。型紙は細模様(奉書紙の全紙約四分の一)を繰返し用い、総柄に仕上げている。花文は紅色、あずき色、黄色、牡丹葉は緑色が色差しされ、梅文には隈取りが施されている。文様を色差しした後に花文のみ糊防染し、藍の引き染めで地色を染めている。形態は、単衣仕立て。衿は布を贅沢に使った広衿で、内側に折り返している。衿肩明きが短く、後身頃への繰越はつくらず、衿丈が長く、衿下が短い。袖は付けづめで、身八つ口や振りはなく、袖口下を縫いふさがなく広袖である。脇にはマチ(ワチスビ)をつけない。

袖口の始末はせずに耳のままである。衿端は折伏せ縫いになっている。後ろ身頃の身幅に対して、前身頃は衿付けの際に縫い代を大きくとり(縫い代8.0cm)、身幅を調整している。裾始末は、背縫いと衿付けの後、三つ折縫いしている。縫い糸は背縫い、脇、衿付けに白の木綿糸を、それ以外には水色の木綿糸を使用している。現在の縫い糸の他に、腰上げ跡や、前身頃の端に1.5cmの縫い代痕が見られる。

○員 数 1領  
○寸 法 等 丈 128.5cm 衿 64.3cm 織幅 35.0cm

○作品概要 文様は牡丹、松、梅、桜文の小文様で、鳶文をあわせ、地間には単体の桜文を散らす。型紙は細模様(奉書紙の全紙約四分の一)を繰返し用い、総柄に仕上げる。単衣仕立て。数力所に小さな虫喰いが認められるが総じて良好である。苧麻地の表裏に文様をあわせた両面染めの紅型で、①広衿、②衿丈が長く、衿下が短い、③広袖の付けづめ、④衿肩明きが小さい、⑤衿下がりが短い、⑥衿肩明きを肩山より後ろ身頃側へずらす繰越がない、⑦後幅は布幅いっぱいを使うなど琉装の特徴を保っている。一部縫い直されており、打掛として仕立てられた琉装を帯をしめる和装着物として用いていたと思われる。布地は極細の苧麻糸で織られた一級の上布であり、もともとは首里の上級士族向けの紅型衣裳であった可能性が高い。



○購入金額 3,200,000円 (平成22年度第1回鑑査会議)

14 ○種別  
○名称

<染織>  
茜地山水松鶴文更紗  
(あかねじさんすいまつづるもんさらさ)

○作者等 インド・コロマンデル海岸

○時代 17-18世紀

○品質 木綿。インド更紗。木綿単糸平織(経:Z・34本/cm

緯:Z・28本/cm)。片面染め、描き染め、蠟防染。広幅の布一面

を濃い茜色に染め、山水模様を描き染めと蠟防染にて表す。矩形をいくつも重ねて表した岩山に沿って滝が表され、流れ出した水流は池となり、水辺には太い松の樹、苔むした岩、2羽の鶴、さらに続く川と見られる水流には、もう1羽の鶴が着水する様子が描かれる。上記の図様を布一面に繰り返す。ひとつひとつの文様は極めて細緻で、カラムカリという手描きのための筆記用具を用いて輪郭線だけでなく陰影、植物の葉脈や髪も極細線で描き込んでいる。鶴の胴体には花唐草、池の水文は蠟防染で渦巻文を描くなどいたる所を細線で装飾する。縁回しは華やかな大輪の花の唐草文で、しっかりと太い唐草が途切れることなく巡らされている。全体に擦れや穴が多く、インドネシアで補修されたと見られる接ぎあて(インド更紗)が多数認められる。



○員数 1枚

○寸法等 縦 312.0 横 224.0cm

○作品概要

スマトラ島ランブンに伝世した広幅の大更紗。文様のパターンを繰り返すが、すべて手描きで、ひとつひとつの文様は極めて細緻である。山水モチーフはヨーロッパにおける中国趣味に応じて用いられており、本品は本来ヨーロッパ向け輸出品として制作されたと考えられる。類似品としては、京都の祇園祭、南観音山の前掛として使用されている更紗、ニューヨーク・クーパーヒューイット博物館蔵の更紗が知られる。後者はもとオランダの古渡りで、第二次世界大戦後にニューヨークに運ばれたという。彦根藩井伊家に伝来した彦根更紗の中にも本更紗の松鳥文に近い更紗の裂が伝わっている。日本の古渡更紗と同類の更紗がインドネシアに渡り、当初の姿をそのまま残して今に伝わっていたという点で、真に価値が高い。

○来歴 インドネシア・スマトラ島ランブン伝世。1980年代に現地で購入。

○購入金額 10,000,000円 (平成22年度第2回鑑査会議)

15 ○種別  
○名称

<染織>  
茜地花卉鳥獸文更紗  
(あかねじかきちょうじょうもんさらさ)

○作者等 インド

○時代 17-18世紀

○品質 インド更紗。生地は木綿単糸平織(経:Z・23本/cm 緯:Z・22本/cm)。一部両面染め、描き染め、蠟防染。

やや厚めの木綿生地に鮮やかな茜色が地色として染められ、文様はすべて描き染めで表される。茜染めは両端の部分のみ両面に染められ、他はすべて片面染めである。淡い藍色が使われているが裏面には色が抜けていない。意匠構成は中央の矩形と両端の鋸歯文からなり、それぞれの区画の間には黄色地に茜色の縄目文を配した帯が表される。中央の矩形内には蠟防染で立湧様に枠線を引き、枠線内部には側面形の花文を描く。矩形の周りにはこげ茶地に兎文の枠を巡らせ、さらに外側に花卉形の縁をまわし、中は茜色のゴマ手の地文に蹲踞する半人半獣を描く。布地の四分の一位置に接ぎ目が認められる。矩形を囲む茶地兎文の枠の一片が切られ、接ぎあわされた箇所には他の三辺と異なる花卉形の縁まわしが配される。両端に描かれた鋸歯形は直線的ではなく花房の輪郭をとったような曲線を描き、内側は花唐草を中心に両側に猿、鳥がそれぞれ一対で描かれる。両端の左右に帯形区画を設け、中心から外に向かってゴマ手地文に花入りの三角形の区画、こげ茶地に花入りの立湧形の区画を配する。両端の鋸歯文は同じ意匠だが、側面縁の様子は両端で若干異なる。上記のことから、本品は似通った意匠の兄弟裂2枚を接ぎあわせたものとみなされる。裏面の端2箇所に「4」の字を載せたハート形 VEIC 印が捺される。



○員数 1枚

○寸法等  
○作品概要

縦 239.0 横 112.0cm

南スマトラで儀礼用の布として使用されていたインド更紗。中央の矩形と両端に鋸歯文で構成され、文様はすべて描き染めである。本品の裏にはイギリス東インド会社が 18 世紀末まで商標として使用していた。「VEIC(United East India Company 連合東インド会社)」の印が捺されており、イギリス東インド会社によって南スマトラにもたらされたことが考えられる。本品のように端に鋸歯状の模様をともなったデザインのもの、腰巻として着用した際に裏地が見えやすいため、端の部分のみを両面染めにしている。一方、藍色が裏に抜けていないことから本品の藍染めは浸染ではなく藍泥を直接描き染めしていることが考えられる。

○来歴  
○購入金額

インドネシア・南スマトラ伝世  
4,500,000 円 (平成 22 年度第 2 回鑑査会議)

16 ○種別  
○名称  
○作者等  
○時代  
○品質

<染織>  
クリシュナ物語図金更紗  
(くりしゅなものがたりずきんさらさ)  
インド・ラージャスターン州  
18-19 世紀  
インド更紗。木綿単糸平織(経:Z・28 本/cm 緯:Z・27 本/cm)。  
片面染め、描き染め、蠟防染、印金。

生地は 2 枚(幅 64.5 cm と 56.5 cm) からなり、中心より右よりで接ぎ合わせている。両端には縫い穴が認められる。クリシュナ神の物語を描き染めで描く。中心は 3 段に区切られ上段は鮮やかな藍地で中心軸に向かいあう形で天界の有翼天人が左右 5 人、合計 10 人描かれる。中心の天人は 5 弁の花を散華し、ほかの天人はそれぞれ竖琴、パカーワジュ(両面太鼓)、ヴィーナー(共鳴体のついた弦楽器)、タンブラー(弦楽器)を手に音楽を奏でる。中段は淡藍地に染められる。笛を吹くクリシュナ神を中心に左右に 6 人ずつ 12 人のゴーピー(牧女)を配する。クリシュナは正面形でカチニと呼ばれるスカート、孔雀の羽飾りの冠、足まで届く豪華な瓔珞をつけている。ゴーピーはそれぞれ片手に供物を、もう一方に団扇、孔雀の羽、払子などを手にする。下段は緑地に染められ主文の背景には山岳模様を表す。左側には樹下のクリシュナと乳搾りのための器を頭上運搬するゴーピー、右側には美しい設えの家屋がふたつ並び、クリシュナと貴族風の人物が描かれる。それらを囲うように召使風の男性や牛の群れが配される。下段の地面にあたる最下段は白地に細い罫線が引かれ、茜地の区画を 4 つ配し、中に東屋を描く。これら 3 段の物語図を囲む縁模様の四隅に茜地にハンサ(鷺鳥)を、四辺の縁模様は白地に花唐草を描く。模様の輪郭線のほぼすべてに印金がほどこされた金更紗である。

生地、染め、印金ともに状態は良好である。

○員数  
○寸法等  
○作品概要

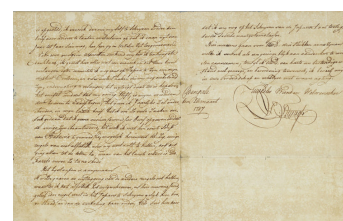
1 枚  
縦 93.0 横 121.0cm

本品は模様の輪郭線のほぼすべてに印金がほどこされた豪華な金更紗である。クリシュナはヒンドゥー教のヴィシュヌ神の八番目の化身。15 世紀末に現在のウッタルプラデーシュ州マトゥラー近郊でクリシュナ信仰のヴァッラバ派が組織され、その信徒たちは 17 世紀にはインド北部ラージャスターン州にも広がった。クリシュナを画題とした裂はヴァッラバ派の寺院装飾として用いられており、本品も本来は寺院装飾のうちピチャヴァイと呼ばれる壁掛として仕立てられたと考えられる。なお、本品のように正面形のクリシュナの図様はラージャスターン州ナタドワラの描き更紗やミニアチュールの図様と同様であることが指摘されている。

○購入金額 7,000,000 円 (平成 22 年度第 2 回鑑査会議)

17 ○種別  
○名称  
○時代  
○品質

<歴史資料>  
長崎阿蘭陀通詞西吉兵衛家関係文書  
(ながさきおらんだつうじにしきちべえけかんけいもんじょ)  
江戸時代・18-19 世紀  
(1~5, 7~10, 13, 14, 18, 22) 紙本ペン書、(6) 紙本銅版、(11, 12, 15~17)  
紙本ペン書和訳文は墨書、(23, 25~35) 紙本墨書、(24) 紙本ペン書カ



- 員数 35点  
 ○寸法等 (1)縦21.2横16.5 (2)縦23.7横37.2 (3)縦23.1横18.8 (4)縦32.8横42.4  
 (5)縦23.0横37.0 (6)縦9.7横19.6 (7)縦24.8横21.4 (8)縦17.6横  
 12.3 (9)縦15.5横19.2 (10)縦13.5横8.7 (11)縦17.8横11.5 (12)縦  
 11.2横18.1 (13)縦18.1横22.8 (14)縦15.7横13.7 (15)縦18.0横11.4  
 (16)縦10.0横14.2 (17)縦6.6横18.5 (18)縦12.0横20.9 (19)縦12.6  
 横15.1 (20)縦22.5横17.8 (21)縦27.4横21.2 (22)縦9.1横13.9 (23)  
 縦18.0横16.6 (24)縦18.5横20.0 (25)縦15.4横15.3 (26)縦10.7横17.0  
 (27)縦13.3横16.2 (28)縦16.2横24.6 (29)縦27.2横19.3 (30)縦26.8  
 横19.2 (31)縦24.6横17.1 (32)縦24.6横16.9 (33)縦24.5横16.1 (34)  
 縦25.5横20.6 (35)縦16.1横14.3cm

○作品概要 阿蘭陀通詞はオランダとの貿易・外交・文化交渉の事務に当たった通訳官兼商  
 務官。三十数家を数える阿蘭陀通詞のうち西家は元和2年(1616)に南蛮大通詞、  
 後に阿蘭陀大通詞となった吉兵衛を初代とする。オランダ商館はオランダ東イ  
 ンド会社の日本支店で、寛永18年(1641)に平戸から長崎出島への移転を命じ  
 られた。

(1)～(5)は、長崎商館長や商館員の書簡。インドのベンガル長官ティツィング  
 やドーフの書簡を含む。

(7)～(22)は開国以降のもので、オランダ人だけでなく、米・英・仏・独人  
 による蘭文と英文による書簡類を含む。多くは貿易に関する簡易な内容。

(23)～(35)は通詞がオランダ語で書いた書簡類。同僚の通詞宛のものが多く、  
 自宅への訪問を乞うなどの簡単な内容。

○来歴 内容から長崎阿蘭陀通詞西吉兵衛家に伝来したものと考えられる。

○購入金額 9,870,000円 (平成22年度第1回鑑査会議)

18 ○種別 <歴史資料>

○名称 紙本墨書大内氏家臣安富氏関係文書

(しほんぼくしよおおうちしかしんやすとみし  
 かんけいもんじよ)

○時代 室町-江戸時代・15-18世紀

○品質 紙本墨書

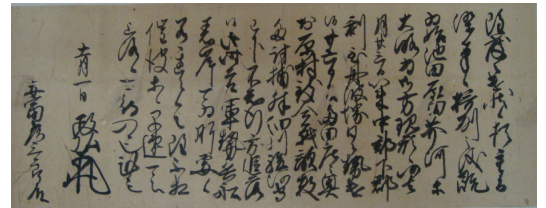
○員数 1巻

○寸法等 (1)縦25.5横34.0 (2)縦15.0横19.9

(3)縦25.7横34.2 (4)縦10.5横26.9 (5)縦25.8横38.2 (6)縦15.7横42.8  
 (7)縦26.6横37.7 (8)縦14.9横41.0 (9)縦17.1横29.9 (10)縦15.2横38.8  
 (11)縦24.6横35.2 (12)縦15.1横35.8 (13)縦22.8横35.4 (14)縦15.6横  
 40.1cm

○作品概要 大内氏は周防・長門を中心に勢力を伸ばし、義弘(1356～99)以降は筑前・豊前  
 の守護職を兼ねた時期もあり、大友氏や少弐氏・菊池氏と争いながら北部九州  
 地域にも勢力をはった。また、朝鮮や明とも盛んに交易を行った。安富氏は  
 大内氏の重臣で、元寿(ゲンジュ)は在京雑掌として活躍した。行恒(ユヰ)などは  
 大内氏奉行人奉書の奉者として名を連ねている。本文書は、大内持世(チ  
 ヱ) (1394～1441)代の15世紀前半から義興(ヨシタカ) (1477～1528)代までの室町時  
 代の文書13通(1～8、10～14)と、江戸時代・延享5年(1748)に大内政弘(マサ  
 ヒロ) (1446～95)感状を一族の安富五右衛門に与えることを記した安富栄誠(ヒデノ  
 ブ)置文1通(9)から成る。明治時代には山口県土族安富氏に伝来していた。

○購入金額 5,200,000円 (平成22年度第3回鑑査会議)



19 ○種別 <歴史資料>

○名称 紙本墨書徳川家康交趾渡海朱印状

(しほんぼくしよとくがわいえやすこうちとかいしゆいんじょう)

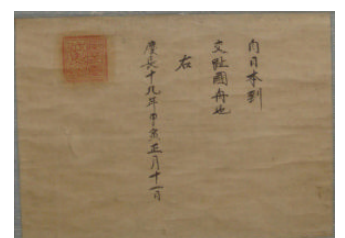
○時代 江戸時代・慶長19年(1614)

○品質 紙本墨書

○員数 1幅

○寸法等 (本紙)縦43.4横60.0cm

○作品概要 掛幅装。紙表具。本文は「自日本到／交趾國舟也／右／慶長十九  
 年甲寅正月十一日(／は改行を示す)」。料紙は篁の目の太い檀紙と





推定されるが、相剥ぎされて薄くなっている。

朱印船制度は、幕府の公許により異国へ渡海する船に朱印状を与えて相手国から航路の安全保障を求めたもの。慶長19年(1614)には金地院崇伝(1569~1633)が発給を担当していた。この頃には下付の日付にとられず吉日を記入しており、慶長19年正月11日付けの交趾国への渡海朱印状は7通が発給されていて、受給者は舟本弥七、唐人三ほかの7名であるが、なお記載にもれた受給者がいる可能性もある。交趾国は現在のベトナム中部から南部にあたり、ホイアンが朱印船の主な渡航先となっていた。

○購入金額 9,500,000円 (平成22年度第3回鑑査会議)

- 20 ○種 別
- 名 称
- 作 者 等
- 時 代
- 品 質
- 員 数
- 寸 法 等
- 作品概要

<歴史資料>

福州沿海図(ふくしゅうえんかいず)

Aucke Pietersz. Jonk もしくは Jan Hendricksz. Tim

オランダ王国・ネーデルラント連邦共和国時代・1663年

羊皮紙著色。

1枚

縦79.0横92.0cm

オランダ製の海図。オランダ人地図製作者 Aucke Pietersz. Jonk もしくは Jan Hendricksz. Tim が、1662年の中国福建省(福州)近海における海戦でオランダ艦隊が鄭成功(1624~62)のジャンク船団を撃破した場面を描いたものである。本図の原本とみられる海図(1662年8月~9月成立)がオランダ国立公文書館に所蔵されており、本図は1663年の年紀をもつことから、同図の副本であると考えられる。

本図は南方を上向きに配し、彩色には4色がもちいられ、海上にはオランダ艦隊と鄭成功のジャンク船団、港湾には城塞都市が描かれており、黒インクのペン書きもある。本図の左上には「北緯26度5分福州の川の手前にある停泊地と港」とあり、計11地点(A~K)についての個別的な解説もあり海洋知識がもりこまれる。オランダ艦隊が鄭成功のジャンク船団を撃破・拿捕した様子がこまかく記されている。

○購入金額 25,000,000円 (平成22年度第3回鑑査会議)

